

高等教育研究センター

# かわらばん

## 春号

名古屋大学  
高等教育研究センター  
ニューズレター第18号

### 教育を科学的に議論するムードを大学から！

#### 教育についての議論は摩訶不思議

センター長になって3年目になりました。戸田山です。また、評価の実務作業チームの一員として作文ほかもろもろの作業に携わってこれまもまた、まる3年が経ちました。みなさんお元気ですか。私はあまり元気でありません。

それはともあれこうしたお仕事をちようだいでして以来、日々の教育を実践するだけでなく、教育の論じられ方、教育の語られ方も、以前より意識的にウオッチするようになりました。そうすると、とても不思議だなあとと思うことが浮かび上がってきたんですね。まずはその話からしましょう。

原子炉を設計したり核燃料の再処理の工程を決めるのに、原子力工学の専門家が関与しない、ということとは考えられません。核反応や放射線などについての専門的知識のない人だけで、「バケツを使ったらいいんでは」とか「溶解塔より沈殿槽を使った方が効率的では」とか議論して事を進めるといふことはいけません。

よね(あれ?)。原子力発電はたいへん複雑なプロセスなので、それをうまくコントロールしていくには、個人的な経験やカン、希望的観測や願望ではたいへん危険です。科学的知識の蓄積と科学的方法の適用がぜったいに必要です。

教育や大学も原子力発電と同じような複雑なシステムだと私は思うわけです。ところが、これだけ専門分化が進んだ世の中で、こと教育についてだけは、誰もが自分はそのについて語る資格と能力があると思っ

てしまわうらしいのです。そればかりか、「さて、教育をどうしていきましようか」と議論するとき、誰もがあまりにも易々と、データに基づいて仮説をたてそれを検証して方針を立てるといふ科学的方法を放棄して、「私の子ども時代は塾はなかった」とか「大講座制が諸悪の根源だ」とか(「小講座制」ではありませんよ、念のため)、「私がこんな風に授業すると、学生の目が輝く」とか、個人的体験と思いをあつげら

んと語る「実感主義的態度」に墮してしまふのです。これって、「ま、このくらい鉄筋抜いても大丈夫だべ」と言うのとどこが違うのでしょうか? 私には分かりません。

#### センター長 戸田山和久

でも、驚くべきことに、この国ではこんな仕方での教育政策が決まってくるのです。すごい国です。先進国とはとても思えません。もとスポーツ選手、劇団の親分、居酒屋の社長などを含むけれど、教育を科学的に研究した人、日本の教育を諸外国の教育と比較してデータを蓄積してきた人、日本の教育を社会的・歴史的脈絡において研究してきた人は二人も入っていない錚々たるメンバーで「21世紀の日本にふさわしい教育体制を構築し、教育の再生を図っていくため、教育の基本にさかのぼった改革を推進する」ために置かれた、ナントカ会議というものがあるらしいです。恐ろしいことに、この会議での素人談義や思い

つきがこの国の今後の教育政策に大きな影響をもつみたいですよ。私だけでなく、東京大学社会科学研究所

### 大学教育改革フォーラムin東海2007開催

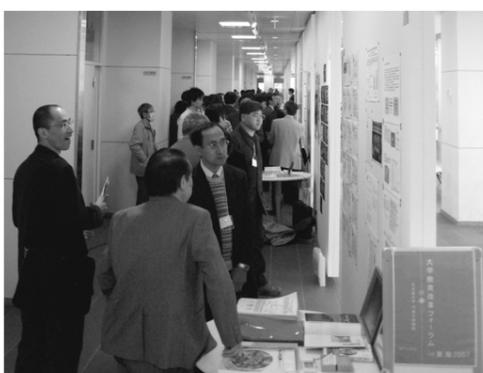
3月10日(土)、名古屋大学で、「大学教育改革フォーラムin東海2007」が開催されました。これは、東海地域の大学の教員・職員が、大学教育を改善するために何をすべきかについて、大学の枠を越えて率直に語り合おうという集まりです。このような会は東海地域ではまだきわめて不十分です。取り組みの進んでいる関西に出かけなくても、身近な場所で身近な人たちと一緒に大学改革のための議論や実践をしようというのが趣旨です。昨年に続き今年も第2回ですが、昨年を上回る140名が参加しました。東海地域の各大学の教職員はもちろん、福島、東京、京都、岡山など遠隔地からの参加者も多く、充実した議論が終日行

れました。

の本田由紀さん(「ニート」って言うな!)の著者として有名です。ちなみに本田さんがニートなのではありません(2007年1月29日付けの朝日新聞オピニオン面で、「教育再生会議を批判する」(あ、書いてちゃった)という記事を寄せて、その素人談義ぶりを批判しています。しかし、お上のやることを嘆いてるばかりではいけません。ひるがえって、われわれの足元ではどうでしょう? 教育についての議論は科学的になされていきますか? われわれの教育活動がどうなのかというデータに基づいて議論がなされて

フォーラムでは、黒木登志夫・岐阜大学学長の基調講演「学長の本音が語るミドルマネジメントへの期待」に続いて、午前と午後の2回、分科会に分かれて報告と議論が行われました。テーマは、「高大連携・初年次教育」「大学職員の専門性と研修」「今求められるキャリア支援とは」「FDが形成すべき能力とは」でした。パネルディスカッション「今、学生は、大学は」では、学生が多様化している中で、学生を成長させるために、いま大学として、教員・職員として何が必要なのかを、3人のパネリストの報告とフロアとの議論を通じて検討しました。さらに、今年の新企画として、ポスターセッションが設けられ、大学職員の育成、学生による授業評価、キャリア教育など、約20の発表が行われました。この取り組みを継続しさらに発展させることを確認して、盛会のうちに会を終了しました。

(夏目達也)



ポスターセッションの様子

### 平成19年度名古屋大学新任教員研修ワークショップ「授業のノウハウやヒントを共有しよう」

平成19年度名古屋大学新任教員研修が去る4月9日(月)に本学東山キャンパス環境総合館レクチャーホールにて開催され、高等教育研究センターは今年も教育ワークショップを提供しました。

「授業のノウハウやヒントを共有しよう」と題する1時間ほどの短いワークショップでしたが、クイズあり、紙工

作あり、グループディスカッションあり、と多岐にわたる内容となりました。終了後には参加者よりメールでのお問い合わせ・コメントなども寄せられました。

今後セミナーや冊子などによる授業サポートをしていきますので、どうぞ活用ください。

(齋藤芳子)

### かわらばんに皆さまの「意見・感想」をお寄せください

裏面のEメールアドレス宛にお願いします。記事の投稿もお待ちしております。

(裏へ続きます)

# Curriculum Glossary

## カリキュラムにまつわる用語集

### キャップ制 (履修科目登録の上限設定)

近年、1年間あるいは1学期間に履修登録できる単位の上限を設けている大学が増加しています。この取り組みはキャップ制と言われています。文部科学省のデータによると、平成16年度に国公私立429大学がキャップ制を採用しています。これは全大学の約62パーセントにあたります。

多くの大学でキャップ制が採用されている理由はどこにあるのでしょうか。文部科学省が毎年キャップ制の調査をしていることも理由の一つだと思われませんが、それだけではありません。低学年次に学生が多く授業を履修するため、学習が中途半端になっていると考えられているからです。学生は、できるだけ早期に単位を揃えたいと考えるようです。学生は高校までのすき間のない時間割に慣れていますが、卒業論文や就職活動のことを考えると余裕をもって高学年次に進みたいと考えているようです。このような学生の単位の早取り傾向を抑制し、個々の授業における学習を充実させるためにキャップ制が活用されています。

名古屋大学においても全学教育科目の早取り傾向が度々指摘されています。必ずしも今後キャップ制を全面的に導入する必要はありませんが、もし導入しようとする場合には、次の2点に気をつけるべきでしょう。

第一に、キャップ制の導入が学生の学習を充実させるものにならなければなりません。単位の早取りの抑制は手段であって目的ではありません。キャップ制によって学生に生まれた時間が、学習活動ではないもののみに向けられていたらキャップ制の意味はありません。キャップ制の導入と同時に、個々の授業の授業時間外を含めた学習活動を充実させることが求められます。

第二に、キャップ制の導入が学生の多様な学習機会を奪わないかどうかを確認する必要があります。インターンシップ、就職課程、海外留学などを希望する学生にとって不利益となるような制度となってしまうはいけません。また、学習意欲の高い学生にも配慮する必要があります。その対策として、キャップ制をGPA制度と連動させ、成績の優れた学生には制限を超えて履修することを認めている大学もあります。(中井俊樹)

(↑表から続きます)

いるでしょうか。われわれも、科学的  
的精神の守り手として、教育につい  
ての科学的議論を尊重するエトス  
の形成に努めなくてはならないの  
ではないでしょうか。

### 目には目を、歯には歯を、 評価には評価を

そこで、提案。「評価評価で、  
もういやになっちゃう」、「法人化以  
降、どうも大学がギスギスしていけ  
ねえや」、あるいは「現場を無視し  
て定員削減ばかり押しつけるんじ  
やないやい」とお嘆きのおにいさん、  
おねいさん。科学的に議論する、  
という大学の得意技を活かして、  
こちらでいっぱつ反撃に出ようじゃあ  
りませんか。大学は、もうやたら  
と評価されています。評価されま  
くりです。しかし、この世では評  
価されていないものがただ二つあるじ  
やないですか。それは、大学を評価  
する側のパフォーマンスであり、大学  
法人化や評価制度などなどの導入  
を決めた政策そのものです。全国  
の日本人の知恵を集めて、ここ10  
年の日本の高等教育政策はどうだ  
つたのか、遠山プランをどう歴史的  
に評価するのか、法人化の功罪は  
何か、法人評価制度・認証評価  
制度の制度設計は妥当だったのか、  
GPAやインシアタイプは大学教育の  
向上に役立ったか、COEは成功  
したのか、そして(一番大切なこと  
は)これらの責任は誰が負うべきな  
のか、それはどの程度なのか。こ  
うしたことについて、徹底的に調査  
し科学的に検証したらどうでしょう。  
つまり、「われわれを評価するなら  
どうぞ、思う存分に評価すればい  
いでしょ。その代わり、われわれ  
もあなたたちを徹底的に評価しま  
すよ、あなたたちの政策決定の功  
罪を総括して語り継ぎますよ」と  
宣言するのです。結構いい緊張関  
係が生まれると思うんですけどねえ。  
どうですか、本学の執行部の皆さ  
ん、全国の大学の執行部の皆さん、  
教育学者の皆さん、全国の教育に  
関心ある科学的マインドの持ち主の  
皆さん、やってみませんか。とくに、  
もうそろそろ大学を去る全共闘世  
代の皆さん。「ソーカッ」はあなた  
たちの得意技だったはずですよ。  
(戸田山和久)

### 新刊



### 『ティップス先生のカリキュラムデザイン』を どうぞご利用ください!

このハンドブックは、大学のカリキュラム開発がスムーズに展開されるよう、主要な論点を整理し、具体的な検討の視点や方法を提供するものです。本学の各部局でカリキュラムの改訂に従事している方々のために制作しました。協働作業を必要とするカリキュラム開発のプロジェクトにぜひお役立てください。(鳥居朋子)

『名古屋大学新入生のためのスタディティップス2007』、『名古屋高等教育研究第7号』も本年3月末に刊行されました。各種冊子ご入り用の方はセンターまでご一報ください。なお、ほとんどの刊行物はセンターのWEBサイトからもご覧いただけます。

### 読んでおきたい この1冊

Great Books on University

伊藤俊洋監訳

### 『スタディスキルズ』

丸善 2005年

研究生生活のエッセンスをわかりやすく示してくれる書籍をあまり見たことがない。そもそも大学院というのは、すでに基本的な研究方法を理解している人が来るところだったはず。しかし、今やその前提が通用しないと感じているのは私だけではあるまい。

本書は英国がん研究所のスタッフが、理系の大学院

生が研究生生活を進めていく上でのヒントを提供しようとして制作したものである。水準的には、大学院に入ったものの、研究生生活上の基礎知識はまだほとんどわかっていないという院生にぴったりだ。お薦めの第一の理由は、本書が特定の学問分野・ディシプリンに依存していないということである。時間の管理、ストレ

ス対策、対人関係、情報検索、批判的な読み方、発表の方法、論文とは何か、学位論文の書き方など、研究生生活をスタートする上での基本事項が網羅されている。第二に、単なるノウハウだけでなく、その本質的な意味もちゃんとつかんでいる。たとえば、「指導教員の仕事とは、院生の研究内容に対して、適切な時期に、的を射た批判と助言をすることである」など。第三に、研究指導の経験が浅い若手教員にとっても参考になる。私自身、4月から大学院で新入生向け授業を担当することになったので、さっそく活用してみたい。

(近田政博)

### 高等教育研究センタースタッフ (2007年4月現在)

センター長 戸田山和久  
専門領域：科学哲学  
教授 夏目達也  
専門領域：高等教育学、技術・職業教育論  
准教授 近田政博  
専門領域：比較高等教育学、初年次教育  
准教授 中井俊樹  
専門領域：大学教育法、高等教育マネジメント  
助教 齋藤芳子  
専門領域：科学技術社会論

<平成19年度 海外客員>  
マリアンヌ・メルクト (ハンブルグ大学、ドイツ)  
ジョージ・ウォートン (カーネギー教育財団、アメリカ)  
<平成19年度 国内客員>  
川嶋太津夫 (神戸大学)  
吉良直 (日本教育大学院)  
本間政雄 (大学評価・学位授与機構)

〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学高等教育研究センター  
Tel 052-789-5696  
Fax 052-789-5695  
E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp  
URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/